

西之表市市制施行 50 周年記念

# 種子島郷土芸能 フェスティバル



日時 平成20年11月23日(日)

会場 西之表市民体育館広場

解説 下野敏見先生  
(元鹿児島大学教授、日本民俗芸能学会評議員、日本歌謡学会評議員)

主催 西之表市  
共催 西之表市教育委員会  
後援 西之表市無形民俗文化財保存連絡協議会



芸術文化振興基金助成事業

## 出演郷土芸能

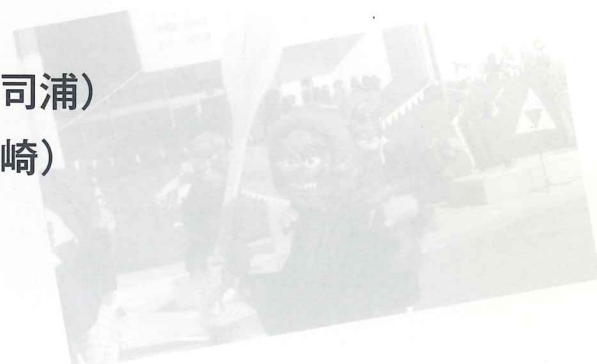
### 第1部 9:30～

ヨンシー踊り (現和庄司浦)

どすこい (西之表洲之崎)

古田棒踊り (古田)

めん踊り (住吉深川)

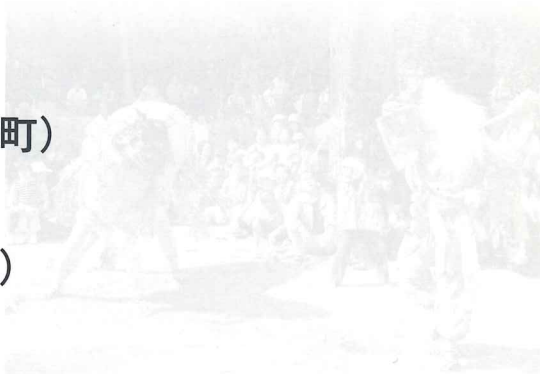


### 第2部 11:30～

虚無僧踊り (現和上之町)

おつや口説き (立山)

横山盆踊り (上西横山)

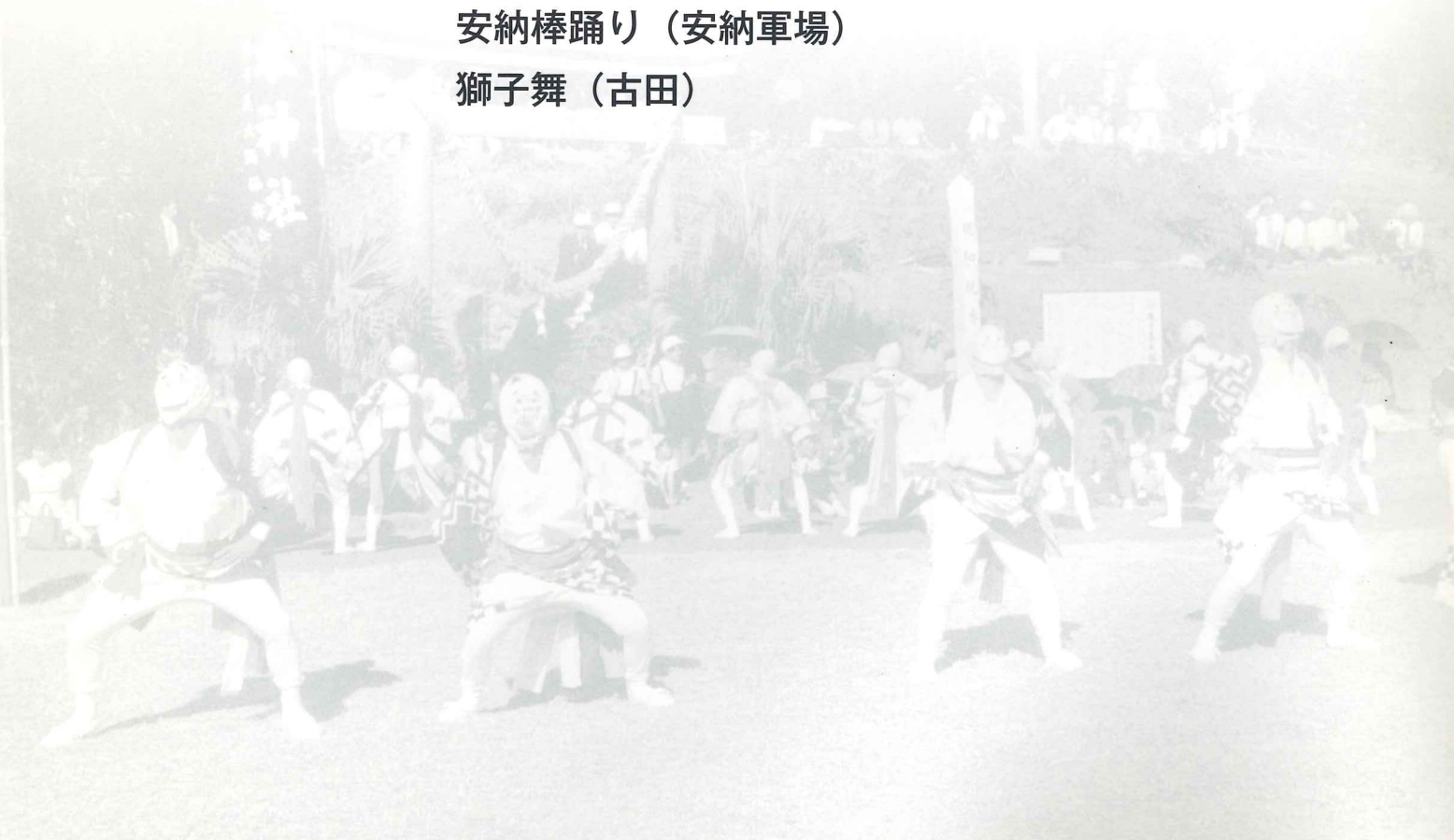


### 第3部 13:00～

源太郎踊り (住吉本村)

安納棒踊り (安納軍場)

獅子舞 (古田)



## 種子島の郷土芸能

### 種子島の芸能

種子島は「民俗芸能の宝庫」といわれるほど多くの芸能が残されている。

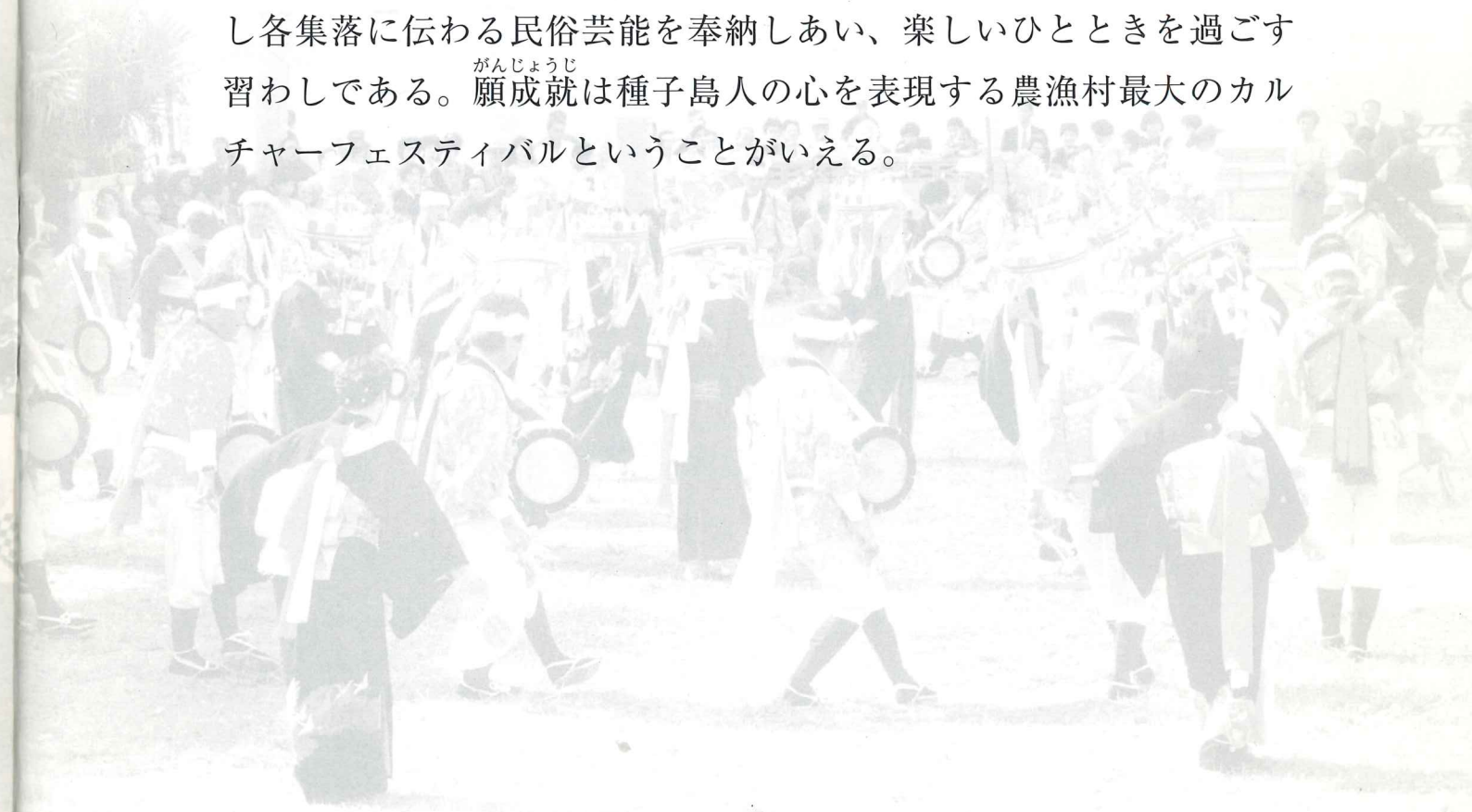
かつて、百数十あった民俗芸能も、現在、過疎化による踊り手の減少、生活様式の変化などで、年々その数は減少しつつある。

種子島の民俗芸能は、種子島大踊り (安城踊り)・源太郎踊り等の大踊り、どすこい・なぎなた踊り等の中踊り・小踊り、それに座敷舞・盆踊り・狂言、<sup>さむらい</sup>士踊り・町人踊りなどに区分される。

日本書紀に天武十年 (681) 「多禰島<sup>たねしま</sup>の人等を飛鳥寺の西の河辺に饗(あ)へき。種々 (くさぐさ)の楽を奏(おこ)しき」と記録されており、種子島の芸能の歴史は奈良時代までさかのぼることになる。奈良・平安・鎌倉時代と変遷するにつれて、各時代の各種の芸能が流入し、今日の豊かな民俗芸能の島に発展したのである。

種子島の芸能の多くは、10月に行われる願成就<sup>がんじょうじ</sup> (豊作を神に感謝する祭) で披露される。

この日は村中総出で料理を持ちより、神社の境内で酒をくみかわし各集落に伝わる民俗芸能を奉納しあい、楽しいひとときを過ごす習わしである。願成就<sup>がんじょうじ</sup>は種子島人の心を表現する農漁村最大のカルチャーフェスティバルということがいえる。



# おど ヨンシー踊り

# げん なしよら じうら 現和庄司浦



## 【由来】

昔、庄司浦の人々が琉球を旅するうちに、琉球で習った踊りを故郷に帰り踊り始めたものであり、その時期は定かではないが、江戸時代の終わり頃ではないかと思われる。

## 【特徴】

琉球王の御殿を建てる時、山師が木を切り、村人が運び出し、山方が家材にこしらえ、大工が細工をして、造りあげる様に歌踊りを付けたもの。それぞれの仕事の道具を持って踊り、種子島の他に例を見ない、たいへんユーモラスな踊りである。

2番あり、それぞれに出端、引端がある。

琉球語で伝えられており、庄司浦の人々も、その意味を知らない。

## 【歌詞】

(出端) サー サー サー サー

声はいでずとー くどいてみましょ (アーヨイヨイ)  
さらば 東西 静まり給え (ソラヨイヨイ ヨーイ ヨーイヤナ)  
ハリヤリヤ コリヤリヤ ヤ ハ アトセー  
西の大殿の お材木 くだるよ (アー ヨイ ヨイ)  
地引き車で 地を引いてあげて  
(ソラ ヨーイ ヨーイ ヨートヤー)  
ハリヤリヤ コリヤリヤ ヤ ハ アトセー  
ふゆかち はやさのか サイ サイ サイ  
それとは神妙な 受け声を 受け声  
たち声はしとして (アーソーレ)  
それなら何でも 語りましょ ヤレ浜松に  
浜松に (アーソーレ)

さぎと鳥が 巣をかけて 小枝を枕に 月をながむるな  
※ふいかの エンヤエイ (アーソーレ)

ヤーコーノ さんさのエーヤーナー (アーソーレ)  
へーばろの へーばろの へーばろ 西谷 でーふらせ  
色の黒さや 村のはじなるな

※ 繰り返し

西方の 西方の 錦のおざいや 雲とたなびくな

※ 繰り返し

(引端) えーい えーい あやじよ ほーほみち ちくよえん

ちよーなさ エイサー 力を合わせ (ソレ) みなちもそろて  
ちおよして はやしのなー えーい えーい ちひき  
おざいもく 西のおやまでん エイサー 力を合わせて  
(ソレ) みなちもそろて ちおよして はやしのなー





### 【由来】

今から約140年前の江戸末期、今の三重県から洲之崎を訪れた人によって伝えられたといわれ、当時の25代島主種子島久尚公の御前でも披露された。

また、大正元年に集団赤痢が発生したときに、病魔退散のお払いとして八坂神社境内で奉納された。

### 【特徴】

「どすこい」は、角力とり節ともいわれ、全島数か所に分布しているが、洲之崎のものは、歌詞が違い、踊り、歌ともにしっかりしている。

それは、はじめ島主に見せるため踊ったためだといわれている。

### 【歌詞】

- |                                      |                                     |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 日にちゃー毎日 たかせが昇る<br>昇るやー たかせが一度でくだる  | 4 稚児の前髪を切らさるならば<br>わしも切りましょう さんま袖下を |
| 2 嬉しゅやめでたの若殿様よ<br>五葉もやーしごけでせもよけれ     | 5 つつじ椿は 野山を照らす<br>殿のおめしは なら照らす      |
| 3 ひとせー古松 みどり葉の上で<br>鶴がやーうたえばさんま 亀が舞う | 6 障子あくれば角力場が見ゆる<br>明日はどの手でなぐるやら     |



### 【由来】

日置郡から安城に移住後、古田に住むようになった上妻次郎氏が、大正10年、当時青年団会員の上妻静馬氏に教えたのがはじまりである。

その後、毎年古田の豊受神社の願成就の余興として踊り伝えられてきたものである。

### 【特徴】

棒と鎌との打ち合いが特に激しく勇壮な踊りである。入場・棒突き・踊り1回目・踊り2回目・退場で構成される。

歌やはやしに合わせて踊り、早くて勇ましくテンポのよい踊りである。

### 【歌詞】

- |                    |                            |
|--------------------|----------------------------|
| 1 今こそ参る<br>神に参詣す   | 3 オセロが山は<br>前は大川 (だいかわ)    |
| 2 焼野のキジは<br>岡の瀬に住む | 4 鎌の柄が折れた<br>三束 (さんば) 切りおく |

おど  
めん踊り(県指定文化財)

かみよしふかごら  
住吉深川



【由来】

古くから踊られてきた民俗芸能で、めんを被りひょうたんを腰にぶらさげて踊るところから「ひょうたん踊り」ともいわれる。

めん踊りはいつ種子島に伝来したかは不明であるが、その歌詞より江戸時代初期ではないかと思われる。

以前は、各家の長男だけが踊り、養子や次男、三男には踊らせなかったという。

【特徴】

出端の楽拍子、および時々鳴らす太鼓の調子良さとはうって変わって、メロディーは一抹の哀愁をたたえながら、独特の節まわしで歌われていく。そのメロディー、拍子のコントラストに加えて、全体が統一された芸能となっている。

めんには猿が混じり、道化役を演ずる。哀調とともに滑稽さもたたえ、多分に室町時代頃の芸能の影響も受けていると思われる。

【歌詞】

- |  |  |
|--|--|
| 1 金山に 三味線無いとは 誰が云うた<br>なればこそ こま嬢を 乗せてさまやろう | 3 七曲り小川ですそがぬれたよ<br>小松原入りては 出端も入端も                |
| 2 新舟と 茶舟が無いとは 誰が云うた<br>なればこそ 竹嬢を 乗せてさまやろう  | 4 ほんになりたよ 大和様のひょうたんじゃ<br>昼は御腰に 下げられて<br>キラタンキラタン |

こむそうおど  
虚無僧踊り

げんなかみのちょう  
現和上之町



【由来】

江戸時代の中頃、薩摩藩領内に虚無僧姿で侵入した幕府方の武士に対し、てんびん棒で勇敢に立ち向かった農民の気概をたたえる踊りで、原形は鹿児島市谷山中山地区に伝わる「中山虚無僧踊り」(県指定文化財)とされている。

現和上之町には、明治35年頃、伊集院出身の上平太兵衛という人が仕事で現和に在住したとき伝えられたといわれている。

【特徴】

棒踊りの一種である。棒踊りは種子島の各地に伝えられているが、上之町の踊りは、三列編隊で中央に虚無僧が入る。

【歌詞】

- |                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| 1 今こそ参る<br>神にもめい   | 3 山太郎ガニは<br>河の瀬に沿う     |
| 2 焼野のキジは<br>岡の瀬に沿う | 4 おしろが山で<br>前は大川(だいかわ) |



【由来】

今から約800年前、源氏と平家の争いの最中、当時の源氏の武将石山氏の娘「おつや」が5年前に平家の武将に弓矢で討たれた父親の仇を討つため、京都の東山にある清水寺にこもって、兵法の稽古に励み、薙刀・小太刀・手裏剣をもって、父の仇である藤島氏を探し求めて、見物人の多い中で見事に仇を討ちとり、仇を討つを見ていた人々からも、おつやの見事な仇討ち姿に感激して、籠一竿・金子百両、それにたくさんの人々から心暖まる供応を受け、丹波の国に帰るといふ筋書きである。

いつの頃立山に伝わったかははっきりしないが、立山は今から800年前、平家を追って南下した源氏の祖先が住みついた地域だといわれている。

【特徴】

おつや口説きは、別になぎなた踊りともいわれ、口説きもの（親の仇討ち）を唄や踊りにしたもので、江戸時代に全国的に流行したものである。

口説きものがいつ頃種子島に伝わったのかははっきりしないが、西之表では他に、国上湊に「志賀団七口説き」「上杉源次郎口説き」が伝わっている。

【歌詞】

(女衆)

国を申さば丹波の国よ お名を申さば石山源氏  
 源氏娘のその名はおつや おつやかねがね思いし事よ  
 もうし母様ものたずねあげよう 辺り近所をさるいてみれば  
 他人の子供にゃ両親あるが わしにゃどうして父親ないか  
 そこで母様涙にむせて 涙ながらも口説いてきかしよ  
 おぜが父親五か年前に お江戸おくだり兵庫の射場で  
 遊ぶ射場に駒乗りこんで 弓矢射込んで討たれし人よ  
 さらばそうかよ討たれし人か わしに母様五年の暇を  
 五年経ちても帰らぬ時は わしが出た日を立ち日ととりて  
 四十や余人の出家をたのみ 回向なるよとしてくりやしゃんせ  
 家に帰って旅装束よ したにゃ羽二重その上どんす  
 りんす細帯しっかとしめて 緋のの脚絆に真綿の足袋よ  
 三筋こめたる寒竹の杖 菅のお笠でお顔をかくす  
 三十三番清水寺で 七日こもりて兵法のけいこ  
 けいこするもな そらなになにか  
 一で手裏剣 二でなぎなたよ  
 三で小太刀をすらりーとぬいたえー  
 アーヒーヤーー アーヒーヤーー



(男衆)

ヨーイーヨーイーヨーイー  
 どこもあること駒のと衆や 二十や八日みな寺詣る  
 寺に詣りて 木かげをとりて うちの小者に駒口とらせ  
 駒の手綱をーしっかとおーらえたー

(女衆)

いかに<sup>ふじしまおぼえ</sup>藤島憶はないか 源氏娘のおつやでござる  
父の<sup>かたき</sup>仇じゃ討たねばならぬ

(男衆)

やあーだれが<sup>ちじょく</sup>恥辱で討たれるものか 源氏討ちたも この太刀よ  
<sup>われ</sup>汝もいっしょに しもうてやろう アーヒーヤー

(男・女衆)

お上様より<sup>ごひろ</sup>御披露がとけて お上様から討たしよとござる  
四方四面にもがりが<sup>ゆ</sup>結えて 西と東にご門が立ちて  
東ご門はおつやがご門 西のご門は藤島ご門

(仇討ち場面)

討ちてかかれよ 受けだちよします  
討ちてかかれば はっしと受くる  
斬りてかかれば はっしとさゆる  
手者とお手者の戦いならば  
習いこんだる手裏剣うてば  
運が尽きたか藤島殿よ  
まなこくろいで まえうそぶいて  
<sup>しら</sup>白は なぎなたで首かけおとす

(最後の場面)

<sup>かたき</sup>仇 討ちたは おつやじゃないか  
そこでおつやは よによるこんで  
太刀の先には<sup>くびよ</sup>首つきぬいて  
じゃらやうちぼうをかたげて回る  
これをおみやれ 見物様も  
かごが一竿 <sup>きんす</sup>金子が百両  
<sup>けいしよ</sup>鶏黍二人で お下りなされ



### 【由来】

寛永5年(1628年)、宮崎県高岡の地頭比志島<sup>じとうひししまくにたか</sup>国隆(島津家家老)は、悪政を理由に種子島に遠島となった。ところが国隆の愛妾であった阿久根出身の千代女<sup>ちよじよ</sup>は、単身山川より後をおって種子島に渡ってきて、二人は上西横山に住んだ。

翌年、国隆は切腹を命じられ、このとき千代女も殉死した。国隆51歳、千代女35歳であった。横山の人々は、二人の死をいたみ、特に千代女の節婦としての心情をしので、旧7月7日にその霊をまつり、踊りを奉納するようになった。

### 【特徴】

種子島の盆踊りは、曲も手振りもきわめて静かで荘重、全員がカムキという面(手ぬぐい)をかぶって踊る。カムキは清浄な霊に人の息がかからぬための覆い<sup>おお</sup>であり、同時に踊り手自身が精霊<sup>いけい</sup>であって、静かな中にも霊への畏敬をこめたものである。

横山盆踊りは、曲がいくつもあって変化していくが、千代女の部分は哀調切々として、人の心をうつ調べである。

【歌 詞】

(出端)

種子とりてうれし うえなは 武蔵野の  
しょもくやらん 吾が思い草 茂れ茂れ  
おさまる御代こそ めでたけれ

(めでためでた)

めでためでたの 御殿屋敷 小倉九ツ  
御門八ツ 船は千艘 御金舟よ 金をおろすは 品川に

(梅が枝)

梅枝や匂いにかげるわが心  
富士のうらばにえおく露 その名 玉かづらかけ しばし

(鯉の小池)

鯉の小池 浮いたる舟は 銀の白金 櫓こげや  
おしこめと との浦

(阿久根千代女)

阿久根千代女は 夜舟こぐ  
足もだるんど 手もだるんど まして夜風も 寒かると  
寒かると 寒かると まして夜風も 寒かると  
阿久根千代女は ちご心 玉章 (たまずさ) に  
また唄かえて 花の恋の女に やると見た やると見た やると見た  
花の恋の女に やると見た 花の恋のおんなの おしゃれごと  
うつつ名の立つ 玉章を 水に浮草 笹の露  
笹の露 笹の露 水に浮草 笹の露  
坊のとばせに舟のりて あらし待ちたる 心して  
これも浮世の物語り 物語 物語  
これも浮世の物語

(春の夜)

春の夜の夢 おどろかす くだかけの その君ぎみの物思い  
また逢うことは五つ川の 深き心は かぐち草  
根引きせんと よいかわす 身に捨て草で 捨てられて  
流れし此の身は 淀川の 何をたよりに 浮草の  
波に揺れて 歌語ろう あわんや 君が情けなや情けなや  
それは若草 身はうらみ草 何ぞそなたに 逢いたい話  
秋の別れも せんなかなかれど よしなき恋を  
人にせかれて 面白や

(福神丸)

ことしゃ めでたいの 福神丸に 黄金の台に 松植えて  
一つの枝には 銭がなる 二つの枝には 金がなる  
すえのみどりに 鶴すえて なにとさえずる  
立ちより聞けば ことしゃ よい年 宝の年よ  
道の小草に 米がなる 思いのままに 満腹へ

(引端)

せんとみやまの せんとみやまの 奥の入りには  
ちようと出た よしわか ふじはかまきて 見ればたて袖  
長羽織 裾にやうれし おがのこに よしながきみおいた  
おもしろや







### 【由来】

歌詞の二番に「山口くだりの源太郎よ」とあるところから、源太郎踊りというようになったものらしい。

源太郎踊りは、種子島の代表的な郷土芸能の一つであり、住吉に古くから伝承された後、島内各地に広がった。いつ頃住吉に伝えられたかははっきりとしないが、その歌詞や踊りからみて、室町時代から江戸時代初期頃の間までに伝わったと思われる。

### 【特徴】

歌詞は七つからなり、その一つ一つはまたいくつかの文句からなっている。各々独立した歌詞が集まってできている。

その中のいくつかは、大踊りとしても古くから踊られていた。源太郎踊りは、総勢六十余人で踊られる集団芸能で、優雅で絢爛、そして歌曲、踊り方、隊形の変化の多い洗練された踊りである。

### 【歌詞】

#### 1 (長者殿)

長者殿の親方様のお詣りやる 槍なぎなたで  
お供の衆はまた五百人 草葉もなびけど  
おたちやる イヨー おたちやる

#### 2 (あれこそ)

(1) あれこそこれの 山口くだりの源太郎よ 山口くだりの源太郎よ

(2) 源太郎殿こそ 若衆の中でも若衆ぶる 若衆の中でも若衆ぶる

(3) ヤアー 上のお寺に笛が鳴る アイチョロチョロと笛がなる

(4) 出ては逢いたし ひまはなし うまん  
芋桶を なぜおしゃる ヨーハイ ヨーハイ

#### 3 (音に聞く)

(1) 音に聞く 音に聞く 駿河の国の千代郎殿は  
すりの松女と恋を召す 千代郎殿は十五なり  
すりの松女は十四なり 十四と十五の仲なれば  
言葉に花を咲かせたや

(2) 千代郎殿のおしゃるようには 二つ刀と親兩人は  
捨つるとも よもや捨てじの松女さん

(3) 松女さんのおしゃるようには 唐の鏡と親兩人は  
捨つるとも よもや捨てじの 千代郎殿 千代郎殿

#### 4 (心づくし)

(1) 心づくしの秋野の花よ 見る人ごとよ  
見る人ごとに折りたがる 折りたがる ヨーハイ

(2) 佐賀の斗ますに いちごが盛りて 君末代よ  
君マー末代よ わしゃ一度 わしゃ一期  
ヨーハイ ヨーハイ

(3) めでし偲びの言葉のかけそう まだ濃いなれよ  
まだ濃い 濃いなれん 野辺の草 野辺の草  
ヨーハイ ヨーハイ



5 (近江の国)

- (1) 近江の国の道覚殿は御陣だち ハーイヤー  
あれを見よ これを聞け 坂東名馬に黒鞍しかせ  
小桜おどしの鎧着て ハー兜は八重の磯の富士  
イヨー 磯の富士
- (2) 越前様の御所にこそ ハー 八重菊様とて美人ある  
イヤー 同じ御家中に千寿様とて若衆ある  
イヤー 愛宕詣りに目と目の見参なされける  
恋の玉章贈られた イヨー 贈られた
- (3) 五年この方 偲び申せど 水ほり川ほり 七筋ほりて  
七重の御門に七人ごもりの御番所が 忍びもならぬ  
御生でそよ イヨー 後生でそよ



6 (土佐から)

- (1) 土佐から船が三艘ほど参る 先なは錢よ 中なは金よ  
後なわ土佐の早生米よ イヨー わさ米ならば  
箕でひてはかれ 斗搔は置いて手ではかれ  
斗搔は置いて手ではかれ
- (2) 十七、八の秋の野を行けば 小萩もさかる  
我もさかる 小萩もさかる 我もさかる
- (3) ヤアー 今朝は寝忘れた ほんに寝忘れた  
枕屏風に日が射いた 枕屏風に日が射いた

7 (うぐいす)

- (1) うぐいすが うぐいすが 花踏み散らす 細足で  
大なぎなたで さくと切らばや さくと切らばや  
やらやら見事 やらめでとう やらやら見事  
やらめでとう
- (2) これのお庭に 葦植えて 我よし 人よし  
世間なおよし 世間なおよし  
やらやら見事 やらめでとう やらやら見事  
やらめでとう イヨーハイ イヨーハイ



【由来】

棒踊りは種子島各地にあるが、いずれも鹿児島本土より明治になって移入してきた芸能である。安納の棒踊りは軍場集落に伝承してきたものであるが、始良郡加治木町より安納軍場に移住してきた大工石野政蔵氏から習ったものである。

棒踊りの良さは激しい太刀さばきと一糸乱れぬ集団美にある。元来種子島の芸能は優雅でおおらかである点に特色があるが、薩摩示現流の気合のこもった棒踊りも、種子島に定着した。

【特徴】

島内の棒踊りよりテンポが早く、棒の間に鎌が入っている。

【歌詞】

(出端)

おしろが山は前は大川 かたげたつとは  
中はにぎりめし

(本踊り)

- (1) 焼野のきじは 丘の野に住む  
(2) 山太郎ガニは 川の瀬に住む  
(3) 清めの雨が かさにバアラリと

(引端)

やや山ではエーヘンヨー大川

# 獅子舞(県指定文化財)

ふるた  
古田



## 【由来】

明治時代の末、大分県から<sup>しいたけ</sup>椎茸の栽培のために古田に移住してきた、川野幸太郎氏石井又蔵氏が地区民に伝えたもの。

大正3年に大正天皇御即位記念として初めて披露され、以来毎年10月に行われる<sup>とようけ</sup>豊受神社の<sup>かんじょうじ</sup>願成就に<sup>おかげ</sup>御神楽として奉納されている。

## 【特徴】

獅子2人と天狗と猿2人の5人で舞う。

はじめは獅子を相手に<sup>てんぐ</sup>天狗が茶化す。やがて獅子が怒って天狗におそいかかる。獅子と天狗の激しい争いが続き、一度天狗が負けるが、やがて活気づき、刀と軍配の巧みなあやつりで、終わりには獅子が力尽きて後退していく。

猿はそれぞれ獅子、天狗側につくが、一定の舞の形はなく、獅子及び天狗の動作をまねしながら、ときどき猿どうし争う。舞の道化役を演じる。

舞終わったあと、獅子は1~2歳児の頭を<sup>か</sup>魔よけのため噛んでやる。

鳴物は大太鼓、小太鼓(二人で交互に叩く)、横笛で、横笛は古田に自生しているニガタケで作り、手製のものです。貴重なものである。

歌詞はなく、ところどころで「ホース」という掛け声をかける。



どすこい(西之表洲之崎)



横山盆踊り(上西横山)



安納棒踊り(安納軍場)



源太郎踊り(住吉本村)



めん踊り(住吉深川)



ヨンシー踊り(現和庄司浦)



虚無僧踊り(現和上之町)



古田棒踊り(古田)



獅子舞(古田)



おつや口説き(立山)





西之表市シンボルマーク

